

## 編集室から

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞ宜しくお願い致します。

みなさまの年越しは如何だったでしょうか？来る年を迎える年の瀬は慌しく、越して正月はのんびり～という方が殆どだと思います。私自身もかつてそのような「正しいお正月」を過ごしていました。

ところが、ここ数年、年末年始の過ごし方がガラリと変わりました。

まず、年末。家族が分担してみんなでおせち料理を作ったり、掃除・飾りものをしていた普通の状態から、日ごろ行き来をしているご近所の方々と一緒に協働で、御節を数家庭分大量に作り、みんなで分けてそれぞれのお重に盛り付けて持って帰るようになりました。

そのため、我が家のキッチンが旅館の厨房のような賑わい。というよりてんやわんやの大騒ぎです。ご家庭で微妙に味付けが異なるところは調整しつつ、レシピとにらめっこ。私は片隅で、旧式ストーブの上に陶板でごまめを根気良く炒って田作りにする担当なのは変わりません。手間のかかる逸品も担当分けをすると、お重に入ります。「仕事は大勢」とはよく言ったものです。

元来、集落の春・秋祭りで各家庭とも親類縁者を招いて大勢の祭礼料理を饗していたお母さんたちですから、それは手際が良く進んでいくのは見事な光景です。

明けて、正月。今まで疎遠だった親戚を呼んだり、仕事仲間が訪ねて来たり、今までになかった新しい面々が集うようになり、こちらも賑々しく過ごしています。

代々来客の多い家だったそうですが、今もそういう面は受け継いでいるようで不思議です。

本年もより善き年でありますように。引き続き、どうぞ宜しくお願いいたします。(は)



のと  
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち  
03-5537-3078  
17:00～23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27  
プラザ銀座ビル地下1階  
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2018/01  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2018/01  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

謹賀新年

睦 月



白山比咩神社にて  
by hama



前回の投稿で寿命延長にふれたところ、濱さんから一冊の本を勧められました。『LIFE SHIFト 百年時代の人生戦略』です。さっそく取り寄せて、読んでみました。ザツと言うと、人類の寿命は時代とともに右肩上がり、その勢いでいくと今年生まれた子どもの二人に一人が百歳まで生きる計算になるそうです。そんな時代を如何に生き抜くか、社会はどう変わるべきなのか、に切り込んだ内容でした。小泉進次郎議員が「人生百年時代」としきりに言っているのも、この事によつてです。

しかし私は、本題から外れた二つのことが気になりました。一つ目は、目の前の仕事をこなすために残業をこれだけ必要とする今の日本で、どれだけの人がある「仕事」のステージに居ながら、学び直したり新たなシナリオに挑んだりする余力を持っているのだろうか、と言う疑問です。

そして二つ目は、これまた日本人ならではの、百年の人生を健康に生き抜ける人がどれほどいるのだろうか、という危惧です。細かくは触れませんが、日本人は平均寿命こそ世界トップクラスですが、健康寿命との差、つまり認知症や寝たきりの期間も世界トップクラスです。欧米で長生きする人は概ね元気で、この本の中でも健康への不安は驚くほど希薄です。そのあたりは、狩猟民族と農耕民族の差なのでしょう。少し前になりますが、キンさんギンさんという高齢双子姉妹が有名になりました。自分が、あのような姿になれることを想像できますか？



では、今回の本題です。健康な長寿のために、最も効果的と思われることは何でしょうか。日本には、何も症状がない人に血液検査や胃力メラを

したりCTまで撮ったりする、検診という世界に類を見ないシステムが存在しています。その折角の検査結果ですが、異常値の全くない人はどれぐらいの割合かご存知でしょうか？なんと1割前後しかいません。健診を受けた人の9割は、何らかの異常値を指摘されているわけです。そして異常を指摘された人の過半数は、その検査結果を放置しています。健診の正常値にどれ程の意義があるかは確かに議論の余地はありますが、ヤバイかなと思いつながら知らんぷりをしている人が極めて多数いることは実感していただけではありませんか。

この時点で介入できれば何とかなる、その後の人生を変える事すらできる、これが糖尿病と四半世紀向きあつてきた私の原点です。そして今、そのような方達を対象にした専門のクリニックを作りたいと考えています。受診へのハードルをできる限り低く抑え、コメディカルが継続して介入する事で信頼関係を築き、そして生活習慣を聞き取って優先順位をつけながらオーダーメイドで改善の方策を話し合う、そんなクリニックです。薬は、その場しのぎでしかなく、人間の健康な長寿にはつながらりません。そもそも痛くも苦しくもないのに、毎回長い時間を待って薬をもらい続ける人がどれだけ居るのでしょうか？

この文章を書いているのは、そうした私の夢を実現させるために何が必要かを自分の中で整理する意味もあります。そして今回この本を読んで、自分の進む方向が間違つていなかったと確信することができました。気持ちを新たに、また来年も、月々の投稿を続けたいと思っています。今回も最後までお付き合ひいただき、ありがとうございました。



【プロフィール】  
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でヌクヌクしています。

## 濱のつぶやき 『覚悟』

稀有なご縁を頂いて、ある大成幸者の方と交流させていただいている。その方は、元々京都の加茂川沿いの億ションに住んでおられたが、東山の一角にある登録有形文化財の豪邸に移られた。迎賓室は、あのタイタニック号の姉妹船アドリアティック号のダンスホールがそのまま移設され、随所に手すり・木製のシャンデリアなど、同船の遺品が移設されているというお屋敷である。

氏は、そこで不定期にティーパーティーを開催されていて、お招きを頂いた際に、つぶさに邸内をご案内頂いて、築八十年を越えているため、メンテナンスにご苦労されているそうだが、それもすべて覚悟の上で移住を決めたと仰る姿を拝見して、深い感銘を受けた。

世は起業流行である。一念発起して事業を興す。代表としてすべての決定権を握り、思うがままに経営ができる。一方で、全ての結果責任を負う。良い面・華々しい面の裏には、陰の面・見えない苦労が必然的に伴っている。世間の目は、往々にしてその陰の苦労に気づかず、

表の華麗な部分のみを見てあれこれという。

成幸を羨む気持ち、それが高じると妬みに至るこの感情が芽生える根っこには、「自分にはできない。自分にはあは成れない」という「考え」がある。このダークサイドの思考が、他人の成功を余計に眩しいものに見せ付けてくれる。

成功事例に接したとき、環境条件・歴史背景などを論じ、参考にならないと切り捨てることは、自らの成長・進化を放棄するに等しい。そしてこの手の人は自分の思った通り何も為しえない人でもある。

「あ、いいな。今度は自分の番だ！」と素直になれば、事を成し遂げるスタート台に立ったも同然だ。そして、あとは「成功する覚悟」を決めるだけだ。

起業に挑む人が増えた。一方で、成し遂げ続ける人は稀だ。この差が何処に起因するのか、永く不思議だった。その差は、この「成功する覚悟」にあることを、古都の豪邸で教えていただいた。

不思議なご縁に改めて感謝したい。

iPS細胞から血小板が！

この分野で最先端の研究を進める株式会社メガカリオンは、2018年に臨床試験を始め、2020年には医療現場での利用を目指すという。ほどなく量産化、コストダウンが図られるだろう。血小板の輸血において、iPS細胞由来が主流となる日も近いのかもしれない。すなわち、私の趣味である血小板成分献血が、この世から消滅するかもしれないのである。

未来人はこう言うかもしれない。

「昔は献血という残酷な行為が普通に行われていたらしい」

「生きている健康な人間に太い針を刺すなんて信じられない」

しかし、今を生きる私にとって、この痛みを伴う趣味は割と重要なものになっている。

「自分の血潮が見知らぬ誰かの身体の中でワークするというワクワク」

「いいことをしているぞという自己満足と自己実現と自慢」

「そして献血周期と散髪周期を同期させるというわけのわからないリズム」

現代人にも、

「倒錯的な快樂じゃないか」

と言われても、あながち否定できないことは自覚している。でも、とにかく、続けたいのである。

やりたいことのひとつが、自身の健康上の理由からではなく、外部環境によって奪われるかもしれないというのは、堪えられない。生涯で献血100回を目指していたのだが...現在、実質6年半で56回。雲行きが怪しくなって来た。

個人的には、毛包の再生を優先してほしいところではある。ビジネス的にも、ボウボウに毛を生やすiPS細胞は、巨額の富を生むであろう。

しかしながら血小板の安定かつ安全な供給は、輸血を必要とする患者さんの安心につながる。献血に頼っていたが故の、様々な障害もまた取り除かれるであろう。

喜んで譲ろうではないか。毛髪の再生は後回しで構わない。その時が来たら、献血という趣味は諦める。ただ、悔しいのでその代わりに、別の倒錯的な快樂を始めることにしよう。

参考資料) 京都大学iPS細胞研究所 <http://www.cira.kyoto-u.ac.jp/>

参考資料) 朝日新聞「iPS細胞から輸血用の血小板 2018年にも治験へ」2017/8/7  
<http://www.asahi.com/articles/ASK873HX2K87PLBJ003.html>

参考資料) 株式会社メガカリオン <http://www.megakaryon.com/>

参考資料) 文部科学省「iPS細胞研究ロードマップ」2015年11月

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/046/houkoku/1364984.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/046/houkoku/1364984.htm)

あけましておめでとうございます。しかし、書いている今は2017年も年の瀬も年の瀬ですので、『鬼に笑われる』事と思います。

2017年をあえて一言でいうならば『果報は寝て待て』だったような。決して怠けていたわけではないですが、ここまでやってきた惰性のようなものもあってどちらかと言えば受動的な姿勢の一年だったような気がします。銀座の能登のお店を引き継ぐことになったのも、『棚から牡丹餅』感がなくもないですし。

もちろんより引き継いで経営していくということは決して楽なものではありません。

しかし、『果報は寝て待て』なんて呑気な、言わばドラえもののび太が言いそうな言葉だなと思って故事ことわざ辞典で調べみると『「果報」とは、仏語で前世での行いの結果として現世で受ける報いのこと。転じて、運に恵まれて幸福なことをいう。「寝て待て」といっても、怠けていれば良いという意ではなく、人事を尽くした後は気長に良い知らせを待つしかないということ。』とあります。

あれ、勝手にイメージしていた内容とは違います。『人事を尽くして天命を待つ』と同じではないか。『人事を尽くして天命を待つ』と言うと、何かを達観したようなイメージを持ちますが『果報は寝て待て』は明らかに怠け者が発しているイメージです。小学校の頃にあったことわざカルタの絵柄が、怠惰な感じのちょんまげのおっさんが寝っころがってものであったため、そこでイメージが刷り込まれてしまいました。

そこで他にも気になることわざを一部挙げてみました。

#### 1.矛盾したことわざ：『二度あることは三度ある』、『三度目の正直』

どっちに転んでも使えるように、都合よくどちらにでも解釈できるようにつくられたのでしょうか。

#### 2.息子2人に、娘1人?：『一姫二太郎』

自身が親になるまで知りませんでした。一人目の子供は手伝いもしてくれる女の子がよく、二人目で男が理想的。というのが本来の意味です。うちはまさに『一姫二太郎』ですが、娘が小さなママとして本当に面倒見てくれています。

#### 3.能登の男は?：『東男に京女』、『越前男に加賀女』

男はこの地域の男、女はこの地域の女がいいという例え。能登の男も捨てたものではありません。

#### 4.前世の責任までも?：『因果応報』

過去や前世での考えや行いに応じて、必ずそれ相応の報いがあるということ。なのですが、前世の行いを現世の自分が償うというのは、どこか納得感ないですね。しかし、子供達はもちろん来世の自分も幸せな人生であるために、生きている今、誰かを傷つけるような行いはしないという大切な仏教の教えです。

何百年も前から、言い伝えられている「言葉」がこの時代においても納得させられてしまうということは、人としての本質を言い表しているということなのでしょう。2018年は『乾坤一擲』そして『人事を尽くして天命を待つ』年にしようと思います。あと『英雄色を好む』なんて言われるのもいいですね。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』2017.9.23~24岸和田への旅  
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

目指すは泉佐野市、岸和田の山間地にある「牛滝温泉いよやかの郷」に泊まった翌日のこと、南海電鉄の泉佐野駅に降り立つと「よさこい祭り」をやっていた。この日は祭りではなく「ザ・まつり」としてイベントの設えになっていた。よさこいは前座だ。13時近くになっていよいよ「だんじり祭り」集団のお出ましとなった。

だんじりの一番の見どころは地車が角を曲がる時である。勢いよく走りながら直角に向きを変える。4tを超える曲がる機構を持ち合わせないだんじりを走りながら強引に角を回す操作は容易ではない。だんじりは定められた曳行路を何周も何周も駆け巡り、そして曲がり角ごとに「やりまわし」を行う。その迫力とスピードにおいては他の山車には見られないものだ。たいていは、スピードを落とし慎重に行われる。浜松で言う屋台の巡行の時もそうだった。

だんじりを前へ前へと曳く青年団、旋回のきっかけをつくる前艇子(まえてこ)、舵取り役の後艇子(うしろでこ)、後艇子に合図を送る大工方、それぞれのタイミングを合わせるのが難しく腕の見せどころである。速く、正確に「やりまわし」を行うには、それぞれの持ち場を受け持つ各団体の息が合うことが重要となる。それがうまくいかないとだんじりが横転したり、建物に突っ込んだり、前艇子のはさまれたり、時に死亡事故にもなる。

特に気になった役が「前艇子」と「大工方」だ。

「前艇子」はコマの回転を制御するために道路とコマ面の間に木を差し込む。やりまわ



しの時、内側の前艇子は旋回のきっかけをつくり、内側のコマの回転を抑え、だんじりを曲がりやすくする。だんじりが回り込み過ぎて塀や建物とだんじりに挟まれる事故もある非常に危険な役だ。

何と言っても花形は「大工方」だ。だんじりの大屋根や小屋根に乗り、団扇を手に華麗に舞う。揺れるだんじりの屋根の上を棟を飛び越えて舞う。これが実にカッコイイのだ。また、だんじりの前方が見えない後艇子に進行方向を屋根を団扇でたたくことで指示している。

そして、だんじり本体の彫刻が見ものだ。祭りに出ているだんじりの彫刻を近くでじっくり見ることはできないので、それは「岸和田だんじり会館」で目にすることができる。藤井町のだんじりは正面が「桶狭間の合戦」、左側が「長篠の合戦」そして後ろには「本能寺の変」と、彫刻の図柄を信長公記で統一している。彫り物師・黒田一門の淡路の名工、松田正幸の力作と説明がある。各町全て彫り物の謂れがしっかりしている。だんじりの大きさはさほどではないが、彫り物の格は相当なものだ。億をくだらない費用がかかるのもうなずける。

岸和田祭礼には三原則がある。「自主運営、自主規制、自主警備」がそれだ。継承の力となり、世代を超え地域で支え合うまちづくりが岸和田では続くだろう。300有余年、どんなにか困難な時代背景があったかと思う。でも脈々と引き継がれてきた。昔とは比べ物にならないほど面白いことがたくさんある時代にあって、人口20万人の街に観客50万人を集める。

市民の岸和田市に住むことへの満足度はとても高いと聞く。だんじり祭りの果たす役割はとてつもなく大きいことを感じずにはいられなかった。次回は岸和田のだんじりを心行くまで堪能したい。

